

卷頭言

社会福祉法人 日本ライトハウス
視覚障害リハビリテーションセンター

養成部長 芝田 裕一

－阪神大震災被災の記－

平成7年1月17日午前5時46分、西宮市の自宅マンション（3LDK）で就寝中、わずかの揺れを感じて地震だと思い、起き上がるうとうつ伏せになった時にえり首と腰のあたりを掘んで上下にひどく揺すぶられるような強い揺れを感じた（■実際、その揺れは上下40cmもあったと言われている）。大阪地方は地震がないといわれるが、それなりに地震はあった。しかし、その地震は今まで経験したことのない強烈なものであった。その直後にタンスの上にあった物がほとんど落下して身体を直撃し（■この時うつ伏せ状態と着ていた冬用のふとん、毛布が幸いしたのだと思う。仰向ければ身体になんらかの損傷があっただろう）、そして、落雷のような大音響と大雨のような水の音がした（■これらは、近所のマンションのらせん階段が倒壊した音と自分のマンションの屋上にあるタンクから水が流れ落ちた音ではないかと今では推測している）。大変なことが起きているという自覚と非常な恐怖に襲われるのが同時であった。

揺れがおさまり、打撲はあったものの生命に別状はなかったため、起きて枕元のメガネをさがそうとしたが、そこには、本棚が倒れ、ガラス戸のガラスが割れて飛散し、多くの本が散乱していてメガネはみつからなかった（■寝ていた位置が幸いしていて、本棚付近に寝ていれば、どうなっていたことかと思う）。とにかくと思い、スイッチを押したが、すでに電気はストップしていて点灯しなかった。ふとんの横にあり、倒れはしなかった大きな3段になっている和ダンスが40cmほど移動していてドアをふさいでいた（■タンスの下敷きになって多くの方が亡くなったが、この和ダンスの少なくとも上段部分が落下していれば、やはりどうなっていたことかと思う。女房は別の本棚が倒れ、下半身がはさまれたが、自力で脱出できた）。一瞬、ちゅうちょしたが、出口はそこしかないのでそれを必死で動かして廊下に出た。すると全自動の洗濯機が倒れ、ホースがはずれて水道から水が出っぱなしになっていたため廊下は水びたしで

あった（■このあと、長い水のない生活が続くのであるが、この時、洗濯機用の水は止めても浴槽に水をはっておけばよかったですと今では思う。水の必要なことは言うまでもないが、飲料用は手に入る分でなんとか間にあわせられ、風呂は個人では無理で銭湯に行かねばならないが、借りるわけにはいかず、適度な多量の水を必要とするのはトイレなのである。浴槽に水をはっておけばトイレに利用できた）。

余震への不安があったため、手近にあったダウソルをはおり、子供には毛布をかぶせ、メガネのないまま、開けにくくなっていた玄関ドアを無理に開けてとにかく、家族と共に1階ロビーへ降りた。どこで負ったのか、幼稚園年長の娘は手のひらに軽い裂傷があり、出血していた（■子供2人は別室で2段ベッドに寝ていたが、倒れてきた本棚は上段のベッドのさんにあたって傾いたまま止まっていた。ガラスは割れていたが、ベッドの中には入らず、ほとんど床に散乱していた。また、ベッドの上下の柱は、ずれずにそのままであった。そのため、子供は前述のだけであった。準備していた懐中電灯の場所まではたどりつけなかったが、上の子供がベッドの近くにたまたま置いていた懐中電灯が役に立った。とにかく、自分も家族も無事であっただけが幸いであった）。途中、同マンションに居住している既知の視覚障害者夫婦に声をかけたが、幸いなことに怪我もなく、誰かに誘導されてひとあし先にロビーへ避難したあとであった。外はまだ暗く、既にロビーには多くの人達が我々と同様の姿で避難し、不安そうにたちつくしたり、ボソボソ話しあったりしていた。のどのかわきと胃痛をおぼえた。

ひと段落して（■たぶん30分くらいであったと思う）、家に戻ると、電気は通っていて点灯した（■このあとまた停電するのだが、地震後、1時間～2時間ほどで電気は復旧した。漏電で火災にあった所が多数あったのだが、このマンションでは電線に多少損傷があつても幸い漏電はなかった。さらに、被災した時刻が幸いしていて、少なくとも30分あとであれば朝食の準備で我が家は火につつまれていたであろう）。電気をつけ、各部屋の状態を見てあぜんとした。足の踏み場がないとはこのことであろうか。まともにたっている物はほとんどなかった。たっていたのは寝室の例の和ダンスともう一つのタンスだけであったが（■前述したようにこの和ダンスが倒れなかったために無事であったと言つても過言ではない）、寝室も落下したり倒れた物で寝ていたふとんが見えないくらいであった。どうしてここからはい出して来たのかと思えるほどであった。他の部屋では別の洋服ダンスが傾き、ほとんどの衣服が床に乱れてい

た。冷蔵庫も食器棚も倒れ、テレビやビデオ、電子レンジ等の大きさ以下の物は全て吹っ飛んでいた（■後でかたづけていると物によれば、どうしてこのような所まで飛ぶのかと思うような、かなり離れた場所で見つかったりした）。3つあった本棚は半壊から全壊状態で多数の本がその他の多くの物とごちゃごちゃになり、美術全集のような重いものもかなり遠くに飛んでいた。物と共に割れたガラスが多数散乱していたため、家への出入りは靴をはいたままであった（■食器、ガラス製品等は9割方が割れており、電気製品、電話機、風呂のガス等の故障がそのあと次々と出てきた）。幸いなことにメガネは本の下から無事に見つかった（■今ではメガネはハードケースに入れて枕元に置いている）。

玄関に落ちていたパンケース（■暖房を避けるためパンケースは玄関に置いていた。中のパンはそのままであった）を持ち、バターナイフは出せなかったが、倒れている冷蔵庫からジャム、バター、チーズなど出せるものを出してきて車の中で朝食をとった。自分の身辺の状態が把握できると他に思考が移っていき、両親がおり、職場のある大阪はどうなっているのかと新たな不安が頭をよぎった（■その時は大阪もひどい状態であろうと思っていた）。あまり、喉をとおらなかった。自宅の電話は不通であったため、マンション前の公衆電話に30分ほど並び、両親と無事であるという相互確認はできたが、職場には通じなかった。多くの人が並んでいたので大阪の詳細な情報は聞けず、また、職場に何度も電話する訳にはいかなかった（■電話は深夜には比較的通じたようである。公衆電話でも通じるものと不通のものがあった。職場とは2日後になって連絡がとれた。職場がほとんど被害を受けていなかったのが信じられないくらいであった。地震の次の日になって阪急電車が西宮北口まで通ったので、大阪の実家へ避難したのだが、梅田が普段通りだったのが、何か拍子抜けするような感じであった）。水浸しの廊下を清掃し、少し片付けをして（■今から思えば、動搖からか目に付いたところからむやみに非能率的な片付け方をしていた）、とりあえず、なんとかテレビをセットすると震源地は淡路島という。そして、通常の番組はなく、神戸等の惨状ばかりが写し出されていた。世間は大混乱なのだと理解でき、今さらながら、大変なことが起きたのだと痛感した。

やっと、自宅付近に思いをめぐらし、駅近くへ出かけてみた。自分のマンションから見える範囲と駅へ行く途中では倒壊しているような家屋はあまり見えなかつたが、塀が倒れ、電柱が倒壊し、ガスの臭いがたちこめていた。道路にも亀裂があちこちに入り、自転車にのった人や歩行の人があてどもなく移動してい

るようであった。駅では阪急電車が脱線して踏切をふさいでいた。踏切から見わたすと見慣れた北の方にある新幹線と南の方にある国道171号線の高架が落下していて既になかった（■新幹線は4月8日に開通したが、171号線は12月まで工事がかかるという。現在、自宅付近の道路はその迂回車でいっぱいである）。この日は車をマンションから離れた空き地に止め、その中で就寝した。カーラジオからは悲惨な状態が続々と報道され、寒さと今後のことでなかなか寝つかれなかった。

この後、自宅の片付けは総合すると1週間ほどかかったと思う。水は2月下旬まで、ガスは3月上旬まで自宅で使用できなかった。マンションは全壊扱いで、共有部分のあちこちの壁や廊下に無数の亀裂が入り、さらに廊下はやや傾斜しており、傾いたらせん階段は既に取り除かれ、ロビーに雨漏りがするなどむぎんな姿をさらしている。現在、立て替えか大規模補強かで話し合いが続いている。建築の規制や日照権、補強の規模、それにその費用、話し合いはまだまだ続くであろう。このマンションは危なそなので移転先を捜している。身体には片付けや水汲みのせいか今も腰痛がある。

以上、記してきたように、今、無事でいられるのは本当に偶然としか言いようがない。遠縁の親戚や知人で亡くなった人や助かった人がいたが、タンスのある部屋に寝ていてそれが倒壊してその下敷きになって亡くなった人がおれば、なにも家具のない部屋で寝ていて天井が落下し、亡くなった人もいた。地震後、逃げ、明るくなつて戻ってみると寝ていた枕のすぐ横にガラスがつきささっていて、数センチの差で助かった人、自宅が全壊したが、その日に限って大阪の親戚宅に泊まっていて助かった人など、何が災いし、何が幸いするのかわからない。「運命」というような一言で片付けたくない事実がまわりにゴロゴロしていた。

この震災で、おおげさな言い方をすれば人生観に多少、変化がおきた。つまり、明日というものは誰にもわからず、その状態がなんの変化もせずに永続するという保証は何もないのだ、築いてきたものが安定しているという保証もないのだ、今までの上に新しく築くことだけに注意を払っておればよいという保証もやはりないのだなどを痛切に感じさせられた。ひととき、ひととき、1日、1日の断片がそれぞれ独立してただ連続しているだけである。家族、財産、仕事、そして健康、もちろん視覚もまた同じであるが、それらをいつくしみ、大事にし、有意義な断片であるようつとめることが必要だと今さらながらつくづく思い知らされた。

（4月20日記す）